Japan Society of Obstetrics and Gynecology

307 Ligase Chain Reaction法によるホルマリン固定パラフィン包埋組織よりの*Chlamydia trachomatis*の検出

愛知医大，蒲郡市民病院*
野口靖之，岡本俊充，保條説彦，内田　聡，
佐藤英子，野口昌良，中西正美，中部　健*，
稗田茂雄*

【目的】近年，遺伝子診断は広い分野で実用され，特に微生物分野における培養困難な微生物，ウイルス・クラミジア・結核菌において，その有用性を発揮している．また1987年Impraimらによってホルマリン固定パラフィン包埋組織よりパピローマウイルスDNAが検出できることが示されて以来，retrospectiveに種々の微生物遺伝子検索が可能となった．そこで今回我々は，遺伝子増幅診断法の1つであるLigase Chain Reaction (LCR)法を用いホルマリン固定パラフィン包埋組織切片より*Chlamydia trachomatis*の検出を試み検討した．

【方法】対象は，子宮外妊娠等により付属器摘出術を施行した15症例とした．ホルマリン固定パラフィン包埋組織を厚さ5μmで切り出し卵管内膜組織を摘出し，脱パラ，プロテナーゼK処理後，LCR法にて*C. trachomatis* DNAを増幅しクラミジアを検出した．さらに，隣接切片を抗クラミジアモノクローナル抗体を使用しABC免疫染色を行った．また対象者血清より抗クラミジア抗体を測定した．

【成績】LCR法により4例からクラミジアが検出された．この4例はすべて血清中の抗クラミジア抗体は陽性であった．しかしLCR陽性4例中ABC免疫染色にて卵管上皮にクラミジアが確認されたのは1例のみであった．ABC免疫染色が陽性で，LCR法で陰性であった症例は存在しなかった．

【結論】LCR法は，ホルマリン固定パラフィン包埋組織より*C. trachomatis*の検出が可能であり，モノクローナル抗体を使用した免疫染色より感度は優れていた．さらにLCR法は，パラフィン組織を使用することでretrospectiveにクラミジア感染の有無を知ることができ，今後この方面の研究に大きく寄与すると思われる．

308 PCR法を用いた妊婦クラミジアスクリーニングの検討-DNAプローブ法との比較-

旭中央病院
塚原優己　寺内公一　永井亜希子　宇田川秀雄
鈴木純行　押尾好浩

(目的)近年開発されたPCR法(以下P法)によるC.trachomatis診断キット(AMPLICOR Chlamydia trachomatis,Roche社)は、DNAプローブ法(D法)に比較し高感度、高特異性を有しスクリーニングに適した検査法だが、一方で偽陽性の問題も残されている。今回、当院で使用してきたD法とP法につき、その臨床的有用性を比較検討した。(方法)妊娠30週の妊婦402例からswab用綿棒を用い子宮頸管より検体を採取し、D法及びP法による検査に供した。いずれかの検査で陽性と診断された症例は、妊娠32週にIgA,IgG抗体検査を施行後エリスロマイシンを投与した。更に分娩時、産褥1ヶ月時にP法、D法、及び抗体の検査を施行した。(成績)妊娠30週の妊婦スクリーニングの時点での陽性率は、P法4.2%(17/402),D法4.0%(16/402)で両者間に差は認められなかった。両検査の不一致例は、P法(+),D法(-)が6例、P法(-),D法(+)が5例だった。陽性例全例にクラミジア感染の既往を疑わせる臨床所見は認められなかった。不一致例の抗体検査の結果は、P法(+),D法(-)例ではIgA値2.88の強陽性例が1例、1.01～1.20の弱陽性例が2例、0.44の陰性例が1例であった。一方、P法(-),D法(+)症例では、全例が1.3以上で3例は2.0以上の強陽性だった。分娩時、産褥1ヶ月時の抗原検査では全例陰転化していた。(結論)妊婦スクリーニングではP法、D法ともに同等の陽性率が得られた。P法はクラミジアが極少量でIgAが比較的低値な場合でも検出可能である半面、偽陽性となる危険性も考慮にいれなければならないもの考えられた。更にいずれの検査法にも偽陰性が存在し、特にP法でその危険性が高い可能性が示唆された。

NII-Electronic Library Service